

これからのお墓を考える

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、葬送儀礼やお墓に関する調査・分析を続け、その成果について「考えさせられる」葬儀

として、計十五回にわたり『宗報』に報告してきました（二〇一八年五月号～二〇二二年二月号）。多くの有識者から提示されたさまざまな論点のもと「葬儀」や「お墓」について議論を重ねてきましたが、常に不可欠の前提となったのが、超高齢化、都市化、家族の変化（単身化・非婚化・家族分散）などに代表される「社会状況の変化」であり、この「社会状況の変化」が葬儀の縮小化などにあらわれていると指摘されてきました。こうした変化を背景とする葬儀やお墓を取り巻く状況は、二〇二〇年初頭から世界中で拡大し続けている新型コロナウイルス感染症によって、さらに急激に変化していく可能性があることか

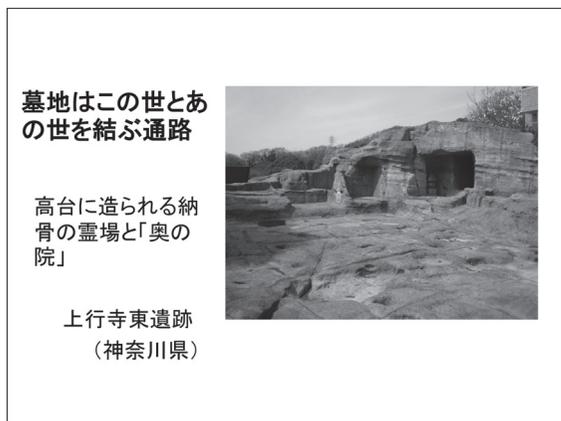
ら、新型コロナウイルス感染症と葬儀に関する報告も計七回にわたり行ってきました。

これまでの報告の中では、「なぜ葬儀が行われてきたのか／行う必要があるのか」、「墓参りはどのような意義や役割を持っているのか」といった本来的な問いを考える必要性が指摘されていますが、特に「お墓」については、十分な報告ができていませんでした。そこで、日本の歴史、あるいは日本仏教史といった大枠から「お墓」を捉え直すことを目的に、日本中世史を専門とする東北大学大学院教授の佐藤弘夫先生をお招きし、研究会を行いました。佐藤先生は、近著において「いまわたしたちが生きている世界を見直すために、近代を遥かに超える長い射程のなかで、現代社会の歪みを照射していくことの重要性」

『日本人と神』講談社現代新書、二五五頁）を指摘され、日本仏教史という枠組みから「お墓」をはじめとする諸問題に取り組みられています。研究会では、古代から近代に至る長い時間のかで、人びとの死生観とお墓との関わりを提示されました。今回は、研究会の内容を当研究所にてまとめて報告いたします。

一、「死者」とともに生きる

佐藤先生は、まず古今東西、人類の歴史において、「死者の存在を否定する文明は存在しない」と端的に述べられたうえ



墓地はこの世とあの世を結ぶ通路

高台に造られる納骨の霊場と「奥の院」

上行寺東遺跡 (神奈川県)

上行寺東遺跡 (神奈川県・写真提供佐藤弘夫先生)

で、その「死者」との関わり方が特に中世から近世にかけて大きく変容していることを示されました。

中世における代表的なお墓は、『餓鬼草子』に見ることができます。そこには、土葬の円墳、火葬の五輪塔や宝篋印塔、そして墓地に

遺体が放置される風葬が混在しています。それらの相違は、一般の人びとが、財力や地位をもつ人びとかの違いを表していますが、共通する部分があります。それは、「死者は匿名」ということです。お墓に関する中世のもう一つの特徴として、霊場への納骨があります。例えば神奈川県・上行寺東遺跡では、阿弥陀如来の磨崖仏のある高台の洞穴に納骨がなされています。また高野山では、納骨塔婆が建てられた様子が『天狗草子』などから窺えます。このような納骨においてもお墓と同様に、「匿名の死者」として葬られたのです。

このように、中世において「死者は匿名」であったことから、誰が亡くなったのか、誰がどこにいたのか、とどこにいったのか、といったことは問題にならなかつたのです。そのため、故人のために家族や親族が、季節ごとに、繰り返しお墓を訪れるといった習慣は、この段階では存在しませんでした。その理由は、「死者はこの世にいない」からです。

3 お墓の変化の背後にあるもの

骨・遺体と魂の関係の変化

○中世—彼岸へ旅立つ靈魂

「遠い浄土」の觀念の肥大化　そこへの通路としての霊場
生き返らない死者　靈魂の依り代としての骨

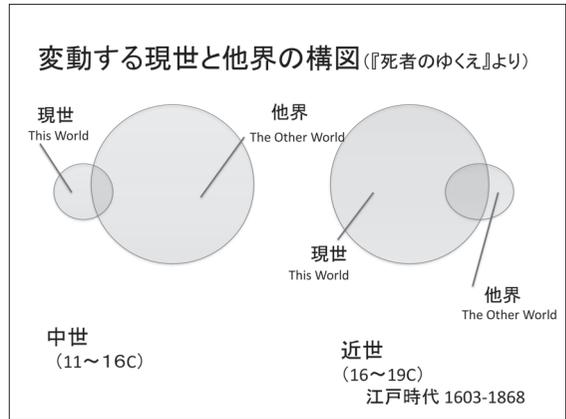
* 死者との再会—彼岸において「ひとつはちす(蓮)の身」(『平家物語』)

○近世—墓にとどまる靈魂

土地への定着と「イエ」の形成

「遠い浄土」の衰退　現世主義の時代へ
靈魂の依り代としての墓石　境内墓地の普及
「草葉の陰」から見守る靈　墓參の定着

* 死者との再会—この世で定期的に



るような、「浄土教の流行」が関わっています。中世の人びとは「浄土教」、すなわち阿弥陀如来に代表される仏による救いを、そして死後の行く先としての浄土を、それぞれの「生(生活や生きること)」の帰結として、社会的に共有していました。「死者」は間違いなく浄土へと往生し救われているからこそ、特定の「死者」を記録に残したり、お墓へ参り続けるといった行為が必要だと認識されていなかったのです。こうしたことから、『餓鬼草子』などに見られる餓鬼は「いまだ救われていない存在」として描かれていたことや、霊場に納骨されたのは、「この世」と「あの世」を繋ぐ場所として認識されていたため

なぜ、「この世にいない」のか。それは、「死者」は神や仏に救われ、「あの世」に間違いなくいつていると認識されていたからです。

ここに、「さらに十一世紀には、現世での頻繁な災害や治安の悪化を背景に末法思想が流行し」(『詳説 日本史』山川出版社、一〇七頁)などと必ず語られる

あることが理解できます。

これに対して、近世に入るとお墓に法名・戒名、あるいは「〇〇家」と刻まれ始めます。「匿名の死者」から「特定の死者」へと変貌するのです。その理由の一つは、中世の世界観が変化したこと、すなわち、阿弥陀如来や浄土がもっていた圧倒的なリアリティの希薄化です。もう一つは、「泰平の世」と評される江戸時代は、「流動化が激しい社会」ではなく「安定した社会」「人びとがそれぞれの土地に定着した社会」であったからこそ、「(永続する)家」が生み出されたことです。これによって「先祖代々」といった形で、「家」を前提として、世代を超えながら、死者を永続的に弔い続けることが可能となりました。近世において「死者」は、どこか遠くの「あの世」にいたのではなく、お墓に代表される近い場所に留まり続け、生者はことあるごとに「死者」と関わりを持ち続けたのです。

二、中世から近世への変化に匹敵する変化

二〇二〇年初頭から世界中で拡大し始めた新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を大きく変化させ、しかも、いまだ収束していない現在において、そうした変化が今後の私たちの生活にどれほど影響を与えるのかも判断していません。

新型コロナウイルス感染症は「新たな問題」を引き起こした側面とともに、「これまで存在していた問題」、あるいは、「今

後起きるであろうと予測されていた問題」を顕在化・現実化させた側面もあります。後者の側面は、葬送儀礼やお墓参りをはじめとする仏事の縮小化に顕著にあらわれています。「葬儀」や「お墓」の問題を考える際に不可欠の前提とされる超高齢化、都市化、家族の変化（単身化・非婚化・家族分散）などに代表される「社会状況の変化」は、昭和・平成の時代にはすでに指摘されていた問題だからです。

こうした現状を前提にして佐藤先生は、現在あらわれている「私たちの生活の変化」は、中世から近世への変化に匹敵するほどの変化をもたらす歴史的な大転換期だと述べられました。このように現代の状況を捉えたうえで、その状況への対応を模索するための論点として、次の二点を挙げられました。

第一に、現代の人びとが納得する言説を構築することです。この際注目すべきは、樹木葬、散骨、手元供養などの需要が高まっている背景に、生者と死者の関係の「個人化」が存在していることです。「個人化」とは、少子化にもなっており、一人が多数の死者と関わらねばならないということ以上に、例えば、家族全員ではなく特定の個人との関係だけを継続したいといった意識を意味します。これまでは「家」を基本とし「先祖代々」すべてと関係し、その関係を前提にして仏事が営まれてきましたが、これからはそうした関係性の上に成り立つ営みが求められなくなるかもしれません。そうした状況や、そうした意識の人びとを前提として、仏教者はどのような言葉を提示してい

るのが問われています。この点に関して、佐藤先生は、親鸞聖人が製作された名号本尊を取りあげながら、「南無阿弥陀仏」による救いの論理を簡明な形で人びとに提示することで、あらゆる人びとが阿弥陀如来のみ教えに出会い、救われていく道が開かれたことに注目されました。親鸞聖人の姿勢に学びながら、私たちも、今の人びとの状況に応じた言説を紡ぎ出ししていく必要があるということです。

第二に、死後世界の排除です。中世・近世では、形は違えども生者と死者とが、あるいは生者と死者の世界が重複・連鎖しており、生と死とが断絶していませんでした。しかしながら、近代から現代へと時代が移る中で、人びとは生と死を峻別し、死を遠ざけ、仏や神、そしてその世界といった「直接見えない」ものを排除しようとしています。しかし、佐藤先生はそれでも大事なことは「人は人とだけでは生きていない。神や仏、死者などとともに生きている」ことだと

生死を区分する時代へ

生と死を峻別する現代人
→封印される死後世界

生と死を貫くストーリーの消失
未知の世界・暗黒世界としての死後世界
死の恐怖の増幅

目に見えない存在を排除する現代社会

三森山



三森山（山形県・写真提供佐藤弘夫先生）

述べられました。つまり、「直接見えない」ものを遠ざけていような人であっても、それでも「直接見えない」もの生きざるをえないという事です。このことをいかに捉え、伝えていけるかが重要です。

この時、一例として「死者と出会う

山」を紹介されました。東北では今でも「モリ供養」が行われ、例えば山形県庄内の三森山は、年に二度だけ開山されます。登山者たちは、限られた機会に訪ね、山で先祖を迎えています。そうした経験の繰り返し、「死者とともにある」ことへの気づきに繋がっていると述べられました。

三、おわりに

佐藤先生は、「死」や「死者」が遠ざけられ、避けられているような事例も見受けられる現代において、それでも、「私たち

は人とだけで生きていくわけではない」「人は神や仏、死者とともに生きていかなければならない」ことの重要性を強調されました。このことを実感し、伝えようとするとき、仏教者は何をどのように語っていくのか。この問いに答えるためには、現代がいかなる状況にあるのか。人びとはどのような価値観を持っているのかをしっかりと把握する必要があります。この時、一つのヒントになるのが、これまで日本で人びとは「神や仏、死者とどのように生きてきたのか」という問いであり、それが、佐藤先生が提示された、「巨視的な視点から見えてくる日本の歴史だといえます。「これからのお墓」を見据えるためには、そうした広い視野から時代の大きな流れを捉えつつ、先人たちの営みを顧み、その意味を深く考えていくことから始めなければなりません。

歴史から現在を位置づけ、過去から現在を問い直す。そうした試みが続けることで、現代における葬儀やお墓、ひいては仏教や浄土真宗の意義・役割を提示していかなければならないといえます。

（報告者：岡崎秀磨・富島信海）